想　像　を　広　げ　る

TURN JOURNAL

SUMMER 2019 —— ISSUE 02



特集

新しい感覚に出会う！
TURNフェス5

文化でつながる。未来とつながる。
Tokyo Tokyo FESTIVAL

2015年からスタートした
アートプロジェクト「TURN」では、
年間を通してアーティストと福祉施設やコミュニティが
さまざまな交流を重ねています。

日常的に出会う機会の少ない人同士の交流は、
これまでたくさんの気づきや変化を生んできました。

『TURN JOURNAL（ターン・ジャーナル）』では、
その交流の際に生まれた表現や思考の一端を紹介しながら、
多様な考え方と、そこに広がる豊かな世界を発信していきます。

今号の特集は「TURNフェス5」です。
年に一度開催してきたアートのフェスティバル「TURNフェス」。
今年は「アクセシビリティ」について考えました。

新しい体感に出会うことがなぜ「アクセシビリティ」なのか、
そこにはどんな体感のターン（転換）があるのか、
その問いから出発していきます。

TURN JOURNAL

SUMMER 2019
ISSUE 02

CONTENTS

02 特集 新しい感覚に出会う！ TURNフェス5

04 会場で体感できる5つのターン！

08 対談 行動や知覚から考えるアクセシビリティ
馬場正尊［建築家］×ライラ・カセム［TURNプロジェクトデザイナー］

14 TURNフェス5の参加メンバーを紹介！

17 コラム 見える人も、見えない人も、みんなが読める文字。

18 エッセイ 私の手話と、同級生の指文字と、よよの筆談
文・牧原依里［聾の鳥プロダクション代表、映画作家］

20 ARTWORK | 池田晶紀［写真家］

24 交流先の声 重なりを見つけることで生まれる共感力
大井妙子［認定NPO法人ももの会理事長］

26 REPORT TURN in HAVANA

30 連載 もうひとつのTURNを考える〈前編〉
わたしたちが傷ついても良い居場所のありか
文・長津結一郎［研究者／九州大学大学院芸術工学研究院助教］

32 表紙のストーリー 交わるアート
岩田とも子［アーティスト］＋富士清掃サービス

出会いにドキッと、探って、立ち止まる!?

特集

新しい感覚に出会う!
TURNフェス5

美術館に突如現れた、新しい感覚と出会えるフェスティバル

東京都美術館の展示室に、4日間限定で現れる「TURNフェス」。アーティストや福祉施設のほか、さまざまな領域の人が集まり、展示、ワークショップ、ステージ、トーク、ガイドツアーなどいろいろな楽しみ方ができるフェスティバルです。

5回目をむかえる今年のテーマは、「Pathways 身のゆくみち」。人は日々さまざまな「道(みち)」を選択していますが、目的地にたどり着く「近道」だけが最善とは限りません。ときには遠回りや寄り道をした経験が、未来の道につながることがあります。

TURNフェス5では用意された動線はなく、会場を自由にめぐることができます。30組以上の参加者が、新たな出会いや体験を提案します。自分の感覚に身を委ね、新しい「Pathways(小道)」を見つけてみませんか。

イラスト・小笠原徹



いつもと何かが違う？

会場で体感できる 5つのターン!

「回転する、転換する」といった意味のある「TURN（ターン）」。
TURNフェス5では、感覚のターン、動作のターンなど、
いろいろな人が参加し、違いや気づきを楽しめる場を用意しています。
静かに見たり、誰かと話したり、踊ったり、休んだり。
でも、いつもの見る・話す・踊る・休むとは何かが違う。
「あれ？」と感じたとき、すでにTURN（ターン）しているのかもしれません。
会場で体感できる5つのターンを紹介します。

文・編集部

TURNフェス5を全身で感じよう!!

TURN 1

言葉を手ばなす

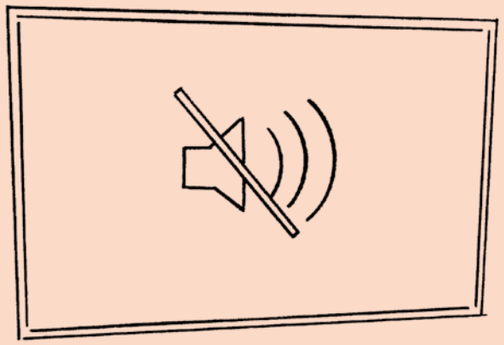
私たちは、話したり、手を振ったり、文字で伝えたりなど、さまざまな方法で意思疎通を図っていますが、それは見る・聞くなどの知覚に基づいています。ではいつものコミュニケーションの方法を手放してみたとき、どんな方法が生まれるのでしょうか。会場では、ワークショップを通して、そうした新たなコミュニケーションの形を見つけていきます。



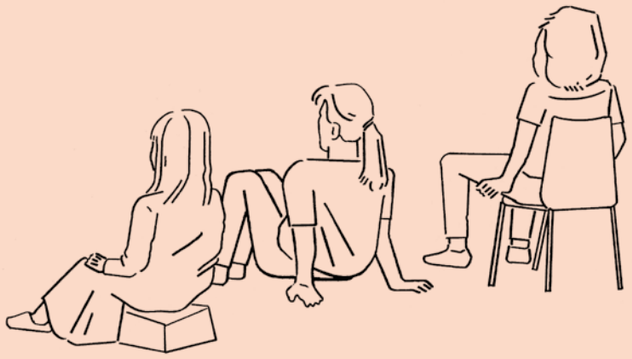
未来言語ワークショップ
音声や文字など既存の言語を超えて、未来の言語を模索するチーム「未来言語」。TURNフェス5では、普段使っている知覚から離れ、「見えない」「聞こえない」「話せない」状態でコミュニケーションを探る「未来言語ワークショップ」を開催。

TURN 2

音を見る



たとえば、サイレント映画は一般的に「音がない」映像ですが、音を「聞く」のではなく、音を「見る」としたら、どうでしょうか。そこに「音がある」のかもしれません。サイレント映画のワークショップや上映から、知覚や発想の転換を体験してみましょう。そこには映像とは何か、音とは何かを考える楽しさや面白さが広がっています。



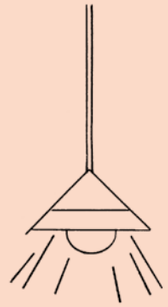
ろう学生がつくる映画と表現
映画作家の牧原依里と東京ろう映画祭実行委員会メンバーが、ろうの中高生たちとつくる映画制作ワークショップ。会場では脚本づくり、素材撮り、編集作業など一連の制作過程を見ることができ、最終日にはそれぞれが制作した映像を披露。そのほか、シアター&プレイルームでは、ろう者、表現、介護、音楽などをテーマにした映画を上映。

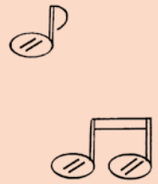
TURN 3

暇を慈しむ

驚き、考え、身体を使うだけではなく、何もせずただ時間を過ごす場所も設けています。耳が聞こえる、聞こえない、目が見える、見えないに関わらず、誰もが持っている無為の時間。何をするでもなく、ぼーっと、その場に身を委ねられる場所。時折ふと他者に想いを馳せながら、なんとなく暇をつぶす。そんな何気ない一人の時間を、誰かと共有してみませんか。







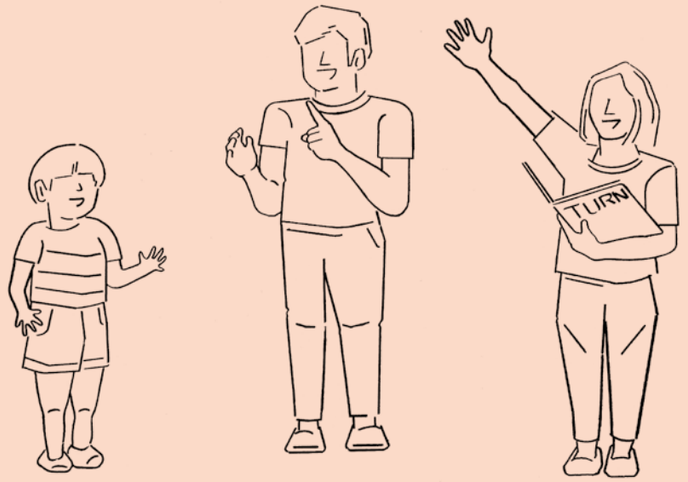
Boat Room – 盲ろう文化でぼーっとボァッと光を抱く部屋 –

TURNフェス3で多様なコミュニケーション方法を共存させ独特な空気感を創出する《光の広場》を提案し、TURNフェス4ではろう者の「うた」をテーマにパフォーマンス作品を発表したアーティストの富塚絵美。今回は盲ろう者の「暇つぶし」に注目し、近くの異なる他者が見ている内なる世界に想いを馳せるための空間をつくり出す。

TURN 4

体験でつながる

会場では、今まで感じたことのない新しい感覚に触れたり、どこかで味わった体感を思い出しモヤモヤしたりすることも。そんなときは、ぜひ最寄りのサポート・ステーションへ。TURN フェスサポーターが何か困ったことがあったときのお手伝いをさせていただきます。言葉にならない感覚や体験について、書き留めてみるのもよいかもしれません。サポーターがお待ちしています。



TURNサポート・ステーション

TURNフェス5の会場に点在するサポート・ステーション。いろいろな背景や経験をもつTURNフェスサポーターと話してみよう。

TURN 5

身体の声を聞く

「おどる」と聞くと、クルクルまわったり、ジャンプしたり、と身体を動かすイメージがあります。ですが「おどる」ことの楽しみが、そうしたイメージで縛られるのはもったいないかも。心臓の鼓動をはじめ、自分の身体に潜むリズムを楽しむことから「おどる」と出会うこともできます。それぞれが持っているリズムは一人ひとり違うはず。いろいろなリズムを誰かと共有すると、新しいリズムが生まれていきます。



大久保由美と仲間たちによるサルサバー

スペイン語でソースという意味の「サルサ」は、ラテンアメリカで生まれたペアダンス。ダンサーの大久保由美が、ラテン音楽を奏でるミュージシャンたちと一緒にステージを繰り広げ、気軽にサルサを楽しめる。サルサを通して自分の「リズム」を見つけよう。

TURNフェス5　開催概要

会　　期：2019（令和元）年 8月16日（金）～18日（日）、20日（火）
開室時間：9:30 – 17:30（16日のみ 21:00 まで開室／入室は閉室の30分前まで）
会　　場：東京都美術館　ロビー階 第1・第2公募展示室
入場無料／手話通訳・文字支援等のアクセシビリティサービスあり
主　　催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京・東京都美術館、特定非営利活動法人 Art's Embrace、国立大学法人東京藝術大学

対談

行動や知覚から考える アクセシビリティ



TURNフェス5のテーマである「アクセシビリティ」とは、直訳すると「利用のしやすさ、近づきやすさ」。足が不自由な人が利用しやすい建物か、目の見えない人が使いやすいウェブサイトか。そうした議論の際に使われる言葉でもあります。アクセシビリティというテーマから「Pathways 身のゆくみち」というタイトルを提案したTURNでプロジェクトデザイナーを務めるライラ・カセムと、建築家の馬場正尊さん。二人の考える「アクセシビリティ」を伺いました。

寄り道をしたほうが豊かで面白い経験ができたり、美しい風景が見られたり、誰かとの出会いがあったりしますよね。―― 馬場正尊

写真・阪本勇　構成・佐藤恵美



TURNプロジェクトデザイナー
ライラ・カセム

×

馬場正尊
建築家／公共R不動産ディレクター

「障害」から、さまざまな能力が開花した

――ライラさんは今回、TURNのプロジェクトデザイナーとして、TURNフェスの企画にも関わっています。また、馬場さんは建築家ですが、視覚障害を後天的に経験されていることから、2017年のTURNフェスに参加されました。はじめに、お二人のこれまでの経歴から伺えたらと思います。

ライラ　私はスコットランドの美大を卒業し、その後グラフィックデザイナーとして働いていました。アイデアやメッセージ、視点を伝える手段としてグラフィックの魅力を感じていたのですが、その力を商業の世界以外でも生かすことができたらと、もやもやしていた頃、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの障害福祉事業所のブランディングプロジェクトに参加しました。その経験から、グラフィックデザインのスキルが誰かをエンパワメントし、社会に役立つ側面があることを実感したのです。そこから東京藝術大学の大学院に進み、デザインの手法に注目して、障害のあるアーティストと商品開発をしたり職員の研修に関わったりしています。今年度TURNのプロジェクトデザイナーを務めているのはそんな経緯からです。

馬場　僕は、今は建築の設計をしていますが、大学卒業後は広告代理店で企画の仕事をしていました。あるとき、やはり大学で学んだ建築の世界に戻ろうと思い、古い建物の再生やリノベーション、そういうことをやっていきたいと考えました。人口減少の未来を考えると、新築よりも再生を視野にやりたいと思ったんですね。当時の日本は、まだそういった言葉も一般的ではなかった頃です。ですので、空間の設計と同時に、そういう考え方を流通させるメディアがあるといいなと思って「東京R不動産」というウェブサイトを始めました。それが15年前です。

障害という点でいうと、あるとき卓球をしていたら、空振りばかりするんです。確かに「見えにくいな」と思って病院にいってみると「緑内障です。すでに普通の人の視野の20分の1ですよ」と言われて。緑内障は治らないので進行の抑制しか手立てはありません、と。びっくりしたけれど、よく考えてみると昔からある一部の視野だけ確かに見えていなかった。そのあと手術もしましたが、やがて活字が見えにくくなり、人の表情も見えなくなり、と少しずつ進んでいきました。それが7～8年前ですね。

ライラ　私は言語、身体、学習という、ある意味トリプルで何らかの障害があります。14歳まで日本にいたので日本語は話せるのですが、全てをわかりきっているわけではないんです。一方で、まちで助けを求めたら「この人は日本語がしゃべれるの!?」と少し驚かれて、まずはそこからコミュニケーションを始めなければなりません。

馬場　ライラさんはさまざまな状況に多面的に対応してこられたので鍛えられたでしょう。ポジティブな意味での「課題」が常に存在している。「一人アクセシビリティ」状態ですね。

ライラ　自分のことは「一人国連」とよんでいます。毎日、あらゆる能力を持った「アベンジャーズ」（同タイトルのアメリカのコミックで、さまざまなヒーローが集結したチーム）が自分の中に存在していますね（笑）。馬場さんも、それまでなかった能力が開花した経験はありますか。

馬場　開花して、自分でも驚いています。見えなくなってから、すべての手が封じられたようで、だいぶ落ち込んでいた時期もありました。社員を養っていく自信もなく、自分の会社も解散しようかなとか。人生のまとめに入っていった。するとコミュニケーションもうまくいかなくなり、発想も乏しくなっていきました。その頃、ある人に「まとまらないところがあなたの面白いところなのに」と言われて。そのことをきっかけに「広げるだけ広げてしまおう」と思い切るようになり、そこから変わりました。メールはアクセシビリティの機能を使って読むようになり、本はスキャンのサービスを使って文字データに変換し、読み上げ機能で読んでいます。テクノロジーを駆使するようになりました。

ライラ　問題解決の能力も高まったんですね。

馬場　それから、人に素直に頼れる技術を身につけました。自分ができることは限られていると悟った途端、いろんな人にお願いをするようになりました。他人の能力に頼るようになり、仕事が好転しはじめたんです。

ライラ　良いリーダーは、ちょっといい加減なくらいがいいって言いますもんね。今の日本のアクセシビリティを見ると、スロープやエレベーターは至るところにあり、フィジカルな面で整っていて抜けた部分が少ないです。一方で、イギリスは道がデコボコ、階段も多い。だから、助けることが普通です。バスの運転手が「車いすが面倒だから乗せたくない」というと、乗客と口論になる。そこで、人との対話と理解の接点が生まれます。

馬場　違う想像力でまちに接しなければいけなくなるのでしょうね。ライラさんはどんなふうにまちに接していますか。

ライラ　私は車いすで移動しているのですが、いつも前の人が歩く方向を観察しています。車いすと歩行とではスピードが違いますし、危険が起こりそうなときは回避するために早く判断しなければなりません。その人の表情から次の行動を読み解こうとするので、自然と観察力がつきました。友人にも「鋭いね」と言われることがあります。

馬場　秘められていた能力が開いていく感じがありますよね。僕もトークイベントの司会やファシリテーションをする仕事が多いのですが、目が見えなくなってから、トーク中にメモをとれなくなりました。なので、頭の中にメモをとるようになったんです。ビジュアルをつくって、キーワードを頭に並べます。

ライラ　マインドマップですね。

馬場　まさにそうです。そうすると、意外な組み合わせから新たなテーマを生み出すことができるんです。目が見えていたときよりファシリテーションはうまくなったと思います。あと文字は読み上げ機能で読むのですが、早読みできるようになりました。文章を書くときも音声で書きますが、誤字脱字が減った、メールの返信が早くなったと言われます（笑）。



馬場正尊（ばば・まさたか）

建築家、オープン・エー代表取締役／公共R不動産ディレクター。1968年佐賀県生まれ。1994年早稲田大学大学院建築学科修了。博報堂で博覧会やショールームの企画などに従事した後、早稲田大学博士課程に復学。雑誌『A』の編集長を経て、2003年 Open A を設立。建築設計、都市計画、執筆などを行う。同時期に「東京R不動産」を始める。2008年より東北芸術工科大学准教授、2016年より同大学教授。近作に「佐賀県柳町歴史地区再生」（2015）、「ShibamataFU-TEN」（2017）ほか。近著に『エリアリノベーション 変化の構造とローカライズ』（学芸出版、2016）、『クリエイティブローカル エリアリノベーション海外編』（学芸出版、2017）ほか。ウェブメディア『団地R不動産』（2011–）、『公共R不動産』（2015–）、『REWORK』（2017–）を運営。2017年より沼津市公園内の宿泊施設「INN THE PARK」を運営。



ライラ・カセム［Laila Cassim］

グラフィックデザイナー、大学研究員。2019年度からTURNのプロジェクトデザイナーを務める。日本生まれ、世界育ちのイギリス人。多人種、障害者など、さまざまなアイデンティティを持つことから自身を「一人国連」と呼ぶ。デザイナーとして、自らのスキルを福祉の現場の専門性と掛け合わせ、障害などのあるアーティストの社会参加、また経済的自立を促すための商品開発、デザインプログラムやワークショップの企画・運営などを国内外で行っている。

私は経験や体感の豊かさを積み重ねること自体がアクセシビリティではないかと思っています。――ライラ・カセム

「身のゆくみち」とは？

――今回のTURNフェスのテーマとなった言葉「Pathways」は、ライラさんが提案したものですよね。



Photo: Yuji Ito

TURNフェス3（2017年）にて、会場内サイン《知覚のライン》を提案した馬場正尊。会場内にさまざまなテクスチャーが添えられた1本のラインを行き渡らせた。ラインに手を添えながら歩いてみると、展示内容が変わるたび、テクスチャーが変化していく。

ライラ　まずTURNの運営側として「アクセシビリティ」という点に注目したい」という視点がありました。「アクセシビリティ」というと、一般的にはアクセスのしやすさや近づきやすさといった、身体的なアクセスに重きが置かれることが多い。ですが、私は経験や体感の豊かさを積み重ねること自体がアクセシビリティなのではないかと思っています。それは行動的にも知覚的にも。そう考えるうちに、アメリカの国道66号線が思い浮かびました。アメリカの東端から西端をつなぐ3755キロもの1本道ですが、この国道からはたくさんの小さな道が枝分かれしています。この小道こそが大事なのではないか、と考えたのです。「Pathway」とは、「小道、通路」といった訳が一般的ですが、「目標にたどり着くための方法」といった意味もあり、今回のテーマにぴったりではないかと思いました。

馬場　初めてきいたとき、きれいな言葉だなと思いました。なんとなく僕らは、目的地には最短ルートでたどり着くのが最善だと思いがちですが、寄り道をしたほうが豊かで面白い経験ができたり、美しい風景が見られたり、誰かとの出会いがあったりする。僕自身は最短距離でたどり着けなくなったから、友人が増えて、いろんな技も身につけられました。頂上を目指して一直線ではなく、一つの山にさまざまな方角からいろいろな道がのびているほうが、豊かな社会になりますよね。「Pathways」という言葉から、そんな風景を想像しました。

ライラ　決して山の頂上にたどり着かなくてもいいんですよね。その途中に自分の気に入った場所を見つけられたら。体感や体験を大事にしたい、という思いもありました。

馬場　日本語の「身のゆくみち」もライラさんが考えたのですか。

ライラ　私は音で日本語を覚えるのですが、「みのゆくみち」って早口言葉みたいでいいなあと思って、スタッフに「意味は通りますか?」ときいたら「大丈夫」と。

馬場　身のゆく……、普段は使わないけれど良い言葉ですね。自立的な感じ、自分が考えて動いている感じが伝わってきます。

ライラ　自立という点では、日本では障害者の自立を促す福祉制度がまだ完全に整っていないなと感じます。どちらかというと「支援」という意味合いが強い。イギリスなどでは、障害者が自立的な生活をすることで、社会参加が増えて経済効果があがると考え、自立のシステムを推進しています。

　私は15歳のとき、イギリスで下肢の手術をしたのですが、そのあと1年ほど歩けないときがありました。仕事をしていた母は、私の通学について市役所に相談にいきました。「申し訳ありませんが、私は仕事をしていて送り迎えができそうにないのです。何か良い方法はないでしょうか」と。そのとき担当者に言われたそうです。「あなたが謝る必要はありません。子供も大事だけれど、あなた自身の自立も大事。自分の人生を歩む権利があるのです」。その言葉に母は救われました。そして、私は高校卒業まで制度を使い、タクシーで登下校しました。私もまちで誰かに助けてもらったときは「すみません」と言わず、「ありがとう」と言うようにしています。

馬場　僕も「ありがとう」だとコミュニケーションがうまくいくことに気づいたときがありました。目が悪くなって助けてもらうことが多くなったんですが、そのたびに「すみません」よりも「ありがとう」というと、良い雰囲気になります。社会全体がポジティブに手伝える方向にモードチェンジできるといいですよね。

ライラ　そうそう、もう少し気楽になったらいいなと思います。いま、学校に馴染めない子供の教育プログ



Photo: Ryohei Tomita

心の病がありながら地域で暮らす人が日中集う場所・ハーモニー（東京都世田谷区）にてそれぞれの思い出の物やエピソードを持ち寄り交換する喫茶店「お金をとらない喫茶展 ～ものもの ものごと ことごと もの～」（TURN LAND、2019年）の企画に携わったライラ・カセム。

ラムにも関わっていますが、日本の学校教育の仕組みは次の段階への準備がほとんどだと感じます。中学は高校入学のための勉強、高校は大学入学のための勉強。何かに備えるための教育は「準備しなければいけない」という一種のマインドコントロールとも言えるのではないでしょうか。例えば、まちで困っている人がいても、準備していないからどう対応していいかわからない、というメンタルに陥りやすかったりする。真面目さがそうさせているような気もします。

馬場　しっかりしていなければいけない、と思ってしまうのかもしれないですね。逆に自己が強いというか。私小説も日本独特の文化ですし。

ライラ　デザインの仕事も英語では「work」ですが、日本では「作品」とよばれることに違和感があります。美術鑑賞も「これは『作品』です」と言われると構えてしまいませんか。何か解釈しなければいけないのではないか、と。TURNフェスでは、〝It's just Artwork!（それはただの作品だよ!）〟という感じに、もう少し肩の力が抜けたらいいなと思います。「作品を鑑賞する」ための場所ではなく、いろんな人が集まって、ただ座っているとかただいるだけとか。余裕があってもいいなあと。

馬場　美術を特別な枠にいれすぎると、神聖化してしまいますよね。それが作品という単語を生んだんだなあ。

心地よい感覚を探していく

――馬場さんは2017年に「TURNフェス3」に参加されたときは、どのような印象がありましたか。

馬場　2017年に参加したときは、最初は「サインを考えてください」という依頼でした。僕はサイン計画の専門家ではないので、視覚障害があることを生かした提案はどうだろうと考えました。それで、指先の触覚で展示内容のメッセージを感じることができる《知覚のライン》を提案したんです。それが、サインというよりも一つの「Artwork」のように受け入れられ、アーティストが《知覚のライン》でツアーをつくってくれるなど拡張していった。いろんな人がいて、どんな角度から参加してもいいよ、という寛容な空気がうれしかったです。僕自身、救われた気がしました。

ライラ　私も《知覚のライン》を体験して、心地いいなと思いました。感じることから開く知恵や感情もありますよね。それが床でも面白いですね。車いすでウッドデッキを進むのってすごく気持ちいいんですよ。

馬場　《知覚のライン》の床版ですね。僕、暗いところや夜など、特に見えにくいときはすり足で歩くんです。すると、足裏でいろんなものを感じ取ることができるんですよね。事務所をシェアしている全盲の人にきいたのですが、駅から事務所までの道を、足裏の感覚で覚えているそうです。石や鉄の感覚を全部覚えていて。全く見えない人は足の裏でこんなにいろいろ感じているんだと思いました。

ライラ　もしも《知覚のライン》の床版がどこかで実現できたら、足裏で感じる経験がまた新しいアイデアを生むかもしれないですね。例えば「触覚的に遊ぶ公園」というキーワードがでてきたりして。

馬場　足裏に注目すると、人にとって心地よい触覚、心地よい振動がありそうですよね。心地よい風景と同じように。

（2019年6月10日）

TURNフェス5の参加メンバーを紹介！

施設職員の日々の思いをラップで披露！

マチーデフ MACHEE DEF



昨年遊びに行った TURN フェスに今年は出演者として参加させていただきます。福祉ホームさくらんぼを題材にしたラップの披露や、TURN 関係者によるラップのど自慢大会などを行います。ぜひ遊びに来てください〜！



ラップづくりのワークショップの様子
Photo: 川口市立映像・情報メディアセンター メディアセブン



マチーデフが司会と講師を務める「立石ラップのど自慢」

PROFILE

マチーデフ ── ラッパー、作詞家、ラップ講師。1997年にラップを始め、オトノ葉 Entertainment のラッパーとして数多くの作品をリリース。2014年発売のソロアルバム「メガネデビュー。」は、自主制作ながら iTunes ヒップホップアルバムチャートで 1位を獲得した。また、アイドルのラップ指導やCMソングの作詞、テレビ番組のラップ監修を務めるなど“ラップクリエイター”としても精力的に活動中。毎週、複数の専門学校で授業を行う“ラップの先生”でもある。2019年、13曲入りのフルアルバム「メガネシーズン」をリリース。ウェブサイトは「メガネ ラッパー」で検索！

&

福祉ホームさくらんぼ Sakuranbo

ラッパー・マチーデフさんとの交流は、始まったばかりですが、「となりのお兄さんが遊びに来てくれた」感覚で、自然にスタートしました。これから、マチーデフさんとさくらんぼが、どんなラップを奏でていくのか楽しみです。





福祉ホームさくらんぼ



工藤かおる 園長

PROFILE

福祉ホームさくらんぼ ── 豊島区福祉施策の一環として、親亡き後対策の視点から、区内に在住する心身に障害のある人が住み慣れた地域でその生活が継続できるよう、また自身の望む地域生活が叶うように長期自立援護、緊急一時保護、短期自立訓練を行う施設として、区民の強い要望に応える形で1992年に設立された。その後、ニーズの高まりにより、レスパイト（ファミリーサポート）、特別事業（医療的ケアの一部）を追加。そのほかさまざまな自主事業を併設し、法内、法外を問わず、地域で暮らすために必要な切れ目のない支援を目指し提供している施設。

TURNフェス5に参加するさまざまなアーティストやチームから、6組を紹介します

人形とミニチュアで映像をつくろう！

飯塚貴士 Takashi Iitsuka

日々の暮らしで感じた喜怒哀楽さまざまな気持ちを人形に込めて映像に残しています。会場では「たまりば※」で収録した音源をもとに「LITALICO」で制作した映像を上映しながら、来場者のみなさんと映像制作に挑みます。今までこっそり一人でやってきた作業を皆で共有することに、大きな期待と僅かな気恥ずかしさを感じています。頑張ります！

※ 大田区立障がい者総合サポートセンターの定着支援として行われている憩いの場。





茨城県結城市「結い市」での上映＆展示の様子



紙人形を使った映像作品《人生限りある倶楽部》

PROFILE

飯塚貴士 ── 1985年、茨城県出身。人形映画監督、人形とミニチュアセットを用いた特撮映像を制作。監督、脚本、撮影、美術、音楽、登場人物の声をほぼ一人で行う。2011年制作の「ENCOUNTERS」が国内外で評価され、近年では実写監督やフィギュア原型師との共作、ワークショップの開催など活動の幅を広げている。おもな仕事・作品に、Eテレ「補欠ヒーローMEGA3」（脚本・演出・美術・編集）、テレビ東京「フォーカード」（監督・キャラクターデザイン）、Eテレ「オトッペ」（脚本・ED 映像演出）など。

&

LITALICOジュニア所沢教室 リタリコ

井改伶（いかいりょう）施設長



このお話を頂いた時、「絶対に参加したい」と強く感じました。日々、お子様と向き合う中で、教室の「中」での経験はつくってあげられても、教室の「外」での経験は工夫しても限界があります。こういった機会を提供できることを、とても嬉しく思うと同時に少しでもお子様の「経験」に、「笑顔」につながることを願っています。



児童発達支援の子供と特別プログラムで作成したカラフル粘土



LITALICOジュニア所沢教室内観

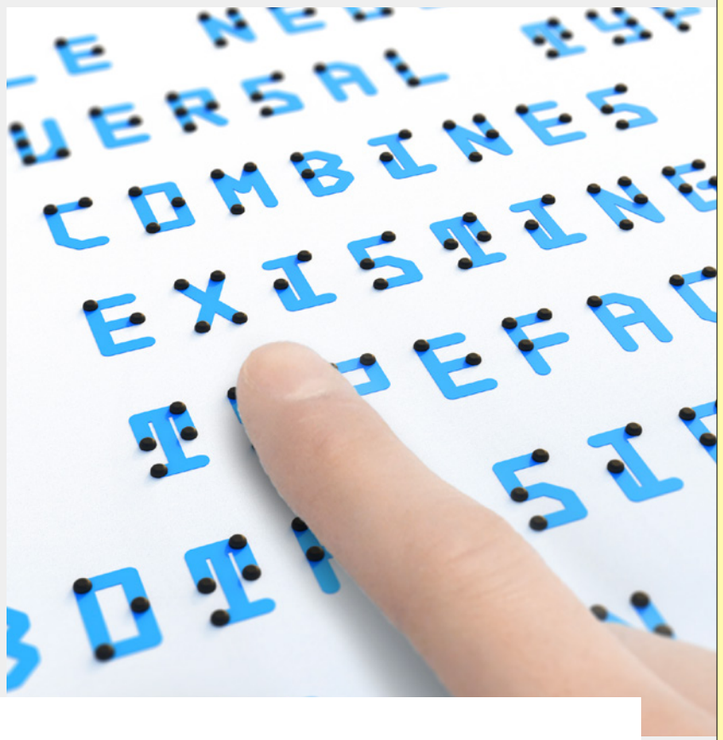
PROFILE

LITALICOジュニア所沢教室 ── 地域、ご家族と一緒に、子供の今と未来の幸せに貢献すべく、情緒面、行動面、学習面に困り感のある子供を幅広く支援している。一人ひとり学び方や特性が違う中、その子にとってどんな方法が一番学びやすいのか、何が一番大切なのかを見つけていく。また、子供のサポートはもちろん、ご家庭での接し方や環境づくりの工夫、園訪問や学校訪問なども積極的に行っている。一人ひとりが楽しく、自発的に取り組むことができ、たくさんの成功体験が積めるような授業づくりを目指している。

コラム

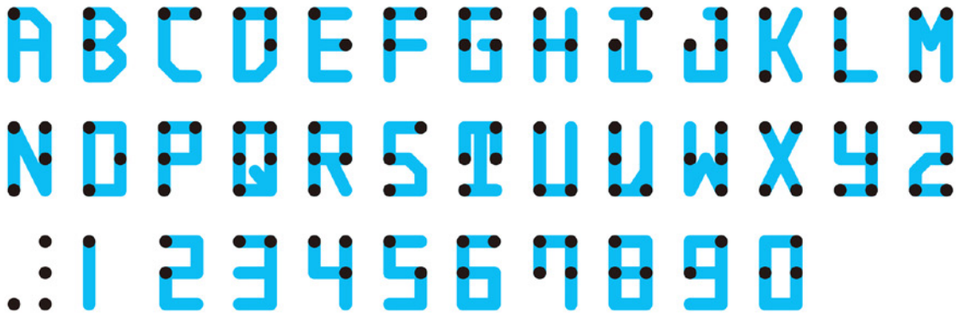
見える人も、見えない人も、みんなが読める文字。

未来言語（→p.05）のメンバーであり、発明家／デザイナーの高橋鴻介（たかはし・こうすけ）さんによって生み出された、目でも指でも読める文字「Braille Neue（ブレイルノイエ）」。点字と文字を一体化することで、見える人と見えない人の間にあるコミュニケーションの溝を埋めるためにつくられた。



Braille Neue





誰もが楽しくアートを！ サッカーを！

アトリエ・エー atelier A



主宰 赤荻徹（あかおぎてつ）

Illustration: Ryunosuke

子供たちが「目的」や「期待」とはかけ離れたところで、ただ好きなように楽しむ場所がもっとあっていいのではと思っています。誰もがいつでも参加できる、楽しくてまた行きたくなる、そんな場所を目指して活動しています。

PROFILE

アトリエ・エー —— ダウン症、自閉症の子供たちを中心とした絵の教室。東京、代々木上原で 2003年から活動。2002年からダウン症の子供たちのサッカーチーム＝エイブルFCも運営している。アトリエにもエイブルにも、スタッフとして、写真家、デザイナー、イラストレーター、編集者、俳優など、さまざまな職業の人たちが参加し、それぞれの興味で子供たちと一緒に過ごす時間を楽しんでいる。「おたがいを知ることで、障害はなくなる」という思いから、絵を描くことやサッカーを通して、スタッフと参加者が友情を育み、豊かな活動を続けている。



アトリエ・エー Photo: Isamu Sakamoto

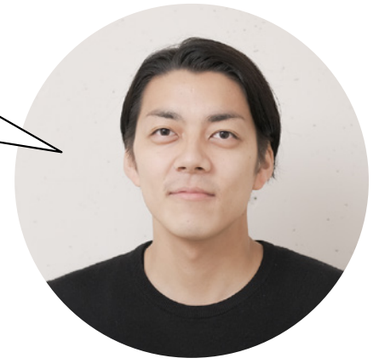


エイブルFC

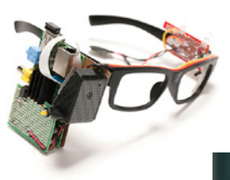
一人ひとりの特性と「ものづくり」のあり方を探索するラボ！

OTON GLASS／FabBiotope オトングラス／ファブビオトープ

TURNフェス5ではわたしたちが今まで議論を重ねてきた「FabBiotope」という構想を発表します。多様性を実現するためのものづくり、それを同時多発化させる、そんなアーキテクチャやメタデザインは可能か？ これをみなさんと一緒に考えたいと思っています。



主宰 島影圭佑（しまかげけいすけ）





眼鏡型装置が目の前の文字を読み上げることで、視界の情報をサポートする



Photo: KIOKU Keizo
Courtesy: 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

PROFILE

島影圭佑 —— 父の失読症をきっかけに文字を代わりに読み上げてくれる眼鏡の研究開発を始め、オトングラスを設立。現在は視覚障害者をはじめとした文字を読むことに困難を抱える人々を対象に製品開発と普及に取り組む。筑波大学助教を兼務し並行して基礎研究に取り組む。金沢 21 世紀美術館での企画展「lab.1 OTON GLASS」を開催、ドバイ、台北、香港など国内外のグループ展にも参加し、研究開発の過程を市民に開く実践を行う。

エッセイ

私の手話と、同級生の指文字と、よよの筆談

牧原依里［映画作家］

TURNフェス5では映画制作ワークショップを企画した、牧原依里さんによるエッセイ。牧原さんは映画作家として、また東京国際ろう映画祭のディレクターとして、豊かなろう文化の世界を伝えています。その活動は、学生時代の原体験につながるのかもしれません。友人たちとの大切な思い出を綴りました。

ここはたまたま、空気がある世界で、音が生まれて、耳を使う人間がたくさん生まれてくる世界だった。そしてたまたま、私はろう者だった。

思えば、今ではすっかり馴染んだ「聴者」も小さい頃の私にとっては「未知の世界に住む人間」だった。小さい時から手話でろう者の親と話し、ろう学校で会う生徒も全員ろう者だった。私が知る聴者はろう学校の先生と、生徒の親、親戚、そして道や電車などですれ違う人だった。幼い私の日常の中にいた「聴者」は私の理解を超えた存在で、口をパクパク動かす人間だった。

海外に留学した経験がある人は、その国で自分が日本人であることを強烈に感じるという。それと同じように、私が小学3年生の時に、ろう学校から地元の学校に転校した時に味わったあのカルチャーショックは今でも忘れない。人が大勢いて、机が沢山あって、名前を呼ばれると声で「ハイ」と返事する。それは私にとって何もかもが新鮮な、聴文化の体験だった。

当時はなぜ声だけで会話できるのか不思議だったし、その理由がわかっている今もなお、時たま不思議に思うことがある。ただあまりにも毎日聴者に囲まれていたので、聴者の思考や文化というものを少しずつ理解していき、聴者（の日本人）のいわゆる笑いのツボも少しはわかるようになってきた。それでもやはり私はろう者である以上、聴者のことは全て理解できなくて、今も聴者での文化や様式に驚かされることがある。

小さい頃は聴者が全てこの世の中を決めているのだと思い込んでいた。ろう学校の時はろう学校の先生（聴者）が言うことが全て正しいと思っていたし、地元の学校に通っている時は先生が言っている内容がわからなくてもそのままやり過ごしていた。けれどもそんな私を変えてくれたのは中学校で出会った、ある女の子だった。その女の子が指文字表を私のところに持ってきてくれたのだ。実をいうと私はそれまで指文字という存在も知らなかったので、その女の子と一緒に指文字を覚えていった。

すると、他の生徒も覚え始め、私が所属していたクラスだけに限らず、同学年にも広まっていった。思春期の子にとって指文字は面白かったようで、授業中にお互いの暗号として使っていたようだった。見知らぬ男子や女子が指文字で私に話しかけてきた時はとてつもなく驚き、動揺した記憶が今でも残っている。「あ、私はこれ以上我慢する必要がないんだ」と、私は声を自然と捨てたのだった。自分にもわからない声で無理やり聴者とやりとりする価値がこれ以上見出せなかったのだ。

実は、この女の子以外に、小学5年からずっと筆談でやりとりしてきた仲が良い女の子「よよ」がいた。彼女とは毎日ずっと筆談でやりとりしていて、彼女とともに同じ中学校に入学した。あまりにも仲が良すぎて、ある日彼女が休んだ時は先生から「よよがいなくて寂しいね」と言われたぐらいだった（彼女は皆勤賞をもらえるほどの出席率で毎日通っていて、休むのは珍しかったのだ。後から聞いたら小豆の食べ過ぎで食あたりになったらしい）。彼女とは筆談しすぎて、もはや手のひらでの空書きで通じるぐらいのレベルに達していた。彼女と一緒に同じ高校に入学するつもりだったが、彼女が受験に落ちてしまい、お互い違う高校に進学することになってしまった。理由はわからないけれども高校生あるあるなのか、あれからプライベートで会わなくなってしまった。

大学生になった頃、なぜか辺鄙（へんぴ）なところで偶然久しぶりに出会った。お互いテンションが上がり、別日によよの家にお邪魔した。久しぶりにA4用紙を広げて、最近の近況やたわいないことを筆談しあった。帰り際にそのA4用紙をゴミ箱に捨てようかと言ったら、よよは「捨てないで。保管する」と言い出した。なぜかくすぐったくて、私の心がキュッとした。「なんで保管するの?」と笑う私に対し「思い出になるじゃん」と返す彼女。そういや彼女が手話や指文字を覚えて使おうとしていた時、私は「よよらしくないからやめて!」と笑っていた。私にとって筆談より指文字や手話の方がずっと話しやすいはずなのに、なぜか「よよらしくない」と思ったのだった。小学5年から中学3年、5年間ずっとよよと筆談しあってきた。その文字数は一体どのくらいにのぼるのだろう。そのノートや用紙を全て捨ててしまったのをちょっぴり後悔している。

私の青春は、彼女たちと、下らない、どうでも良い、若い子にありがちな話で盛り上がる、些細な日々で満ちていた。正直、学校には勉強のためではなく彼女たちとお喋りするために行っていたし、授業中は寝ていたりしていた。音声言語が普段から入らない私にとって、彼女たちは私が社会につながる媒介的な存在だった。彼女たちから授業の内容を伝えてもらっていたら、ほんの少し良い大学に行けていたかもしれないが、私たちは授業の中身を共有しあうことは意味がないと思っていた（先生、ごめんなさい）。彼女たちの恋愛だったり、家族の話だったり、好きな漫画やお笑い芸人の話だったり（そういやラーメンズの動画を日本語字幕付きで見せてもらったが、なぜお客さんは彼らが出てきたら笑うのか、その笑いが理解できないと伝えたら「お前には一生この笑いを理解できない」と言われた）、そんな話の積み重ねで私たちの友情はできていた。

要するに何を言いたいかというと、私は聴者によって決められた基準の中で育ちながら、同じ聴者の彼女たちに私の「当たり前」を壊されたということだった。

人それぞれ「相手」によって「自分」らしさを出せるツールがあって、たまたま私と親は手話だった。私とその中学の女の子は指文字だった。私とよよは筆談だった。そしてその中身はきらめく一瞬の日々だった。

TURNに踏み入れてまだ日が浅いけれど、TURNが目指していることは多分こういう空間なんじゃないかなぁ、と自分の過去をふと思い出したのだった。

牧原依里（まきはら・えり）

ろう者の“音楽”をテーマにしたアート・ドキュメンタリー映画『LISTEN リッスン』(2016)を雫境(DAKEI)と共同監督、第20回文化庁メディア芸術祭 アート部門 審査員推薦作品、第71回毎日映画コンクール ドキュメンタリー映画賞ノミネート等。2017年には東京国際ろう映画祭を立ち上げ、ろう・難聴当事者の人材育成と、ろう者と聴者が集う場のコミュニティづくりに努めている。



ARTWORK

パジャマでおじゃま

池田晶紀［写真家］



© Masanori Ikeda 2018

ポートレイト・シリーズ『休日の写真館』
《パジャマでおじゃま》2018年

この3点の作品(p20-21,23)は、写真家の池田晶紀さんが「社会福祉法人きょうされんリサイクル洗びんセンター(以下、洗びんセンター)」※のメンバー(利用者)が暮らす、「グループホーム フラワー(以下、フラワー)」(ともに東京都昭島市)で撮影した写真だ。
池田さんが初めて洗びんセンターを訪れたのは、4年前。炎天下のなか巨大な洗びん機を操り手際よくリユースびんを洗うメンバーの姿に驚いたのがきっかけだった。「思いがけず、出会ってしまった」感じだったという。それから洗びんセンターに通うものの、洗びんの仕事に従事するメンバーたちは、彼や彼の持つカメラにも緊張していたようだった。「まずは出会いの挨拶をしよう」と考えた池田さんは、お互いの自己紹介のように、メンバー一人ひとりの姿を映したポートレート作品「はじめまして」シリーズを制作する。その後、2年、3年と、相手に寄り添うことを何よりも大切にしながら、交流を重ねていった。
そして4年目の交流で、いよいよメンバーの生活の場であるフラワーへ訪問した。池田さんと一緒に洗びんセンターと交流を続ける写真家の川瀬一絵さんから「普段の暮らしをみてみたい」という希望があったからだ。二人はまるで友達の家に遊びに行くように、フラワーへ通い続けた。メンバーは、はにかみながらも池田さんを部屋に案内し、大切にしているものや部屋に飾っているものを紹介したり個人的な話をしたりした。それはこれまでに見たことのない、リラックスした姿であり、穏やかな表情だった。そこで生まれたのが、この《パジャマでおじゃま》シリーズである。一人ひとりの部屋に“おじゃま”し、メンバーの日常生活を撮影した。積み重ねてきた信頼関係があったからこそ生まれた作品といえる。リサイクル洗びんセンターの職員と一つのチームになり、お互いに挑戦したいことを相談しあえる関係を築いたことも大きく影響しているだろう。
この作品の撮影を通して、池田さんとフラワーに住むメンバーは、また一つ距離を縮めていった。

文・田村悠貴[NPO法人 Art's Embrace]

※ 東京都昭島市にある、就労継続支援事業B型、就労移行支援事業を行う事業所。びんやリユースカップの洗浄、とうふの製造・販売、チラシセット作業、食品加工作業、軽作業、物品販売などの仕事に、現在85名の障害のある人が取り組んでいる(2019年7月時点)。

池田晶紀(いけだ・まさのり)



写真家。1978年神奈川県横浜市生まれ。1999年自ら運営していた「ドラックアウトスタジオ」で発表活動を始める。2003年よりポートレイト・シリーズ『休日の写真館』の制作・発表を始める。2006年、写真事務所「ゆかい」設立。2010年スタジオを馬喰町へ移転。オルタナティブ・スペースを併設し、再び「ドラックアウトスタジオ」の名で運営を開始。国内外で個展・グループ展多数。アーティスト三田村光土里とのアートユニット「池田みどり」としても活動。TURNフェス5では「働くこと」や「就労」の可能性について考える。





© Masanori Ikeda 2018

交流先の声

重なりを見つけることで生まれる共感力

大井妙子［認定NPO法人ももの会理事長］

JR西荻窪駅から徒歩約5分。杉並区立桃井第三小学校の一角にある「桃三ふれあいの家」には、毎日30人ほどのお年寄りが集まり、絵手紙や俳句、囲碁、麻雀、書道、謡曲などを楽しんでいます。このデイサービスは、理科室のあった校舎を改修して2000年に開設。運営を担う認定NPO法人ももの会は、そのほかに高齢者を中心とした地域の人たちが交流できる居場所「かがやき亭」、年齢・性別・障害の有無に関係なくさまざまな人が一緒に過ごせる「だれでもカフェ〜ももふらっと」などの事業を行っています。2017年度からTURNに参加している認定NPO法人ももの会の大井妙子さんに、アートについて、TURNについて、お話を伺いました。

年齢を重ねて「自由」と出会う

――桃三（ももさん）ふれあいの家（以下、ふれあいの家）がスタートして20年が経ちますね。多くの高齢者の方と接するなかで、大井さん自身の変化などはありましたか。

お年寄りと接するなかで、認知症の方は1日のうちにも、またそのときの状況によっても、意識の濃淡があります。その様子は認知症のない方にも同じように感じられます。1日のうちでも良い時があったり、はっきりする時があったりします。人はみなそれぞれ違うものです。だから、障害があるとかないとか、健全だとかそうでないとか、そのような境目ってないのではないかと。これまでの経験から思うことですが、どんな人でも自分と同じところや同じ思いが重なるところがあって、それを見つけることで共感が生まれていくのではないでしょうか。

ふれあいの家には百歳を超える人もいて、通われている方の大半は一人で日常生活を送ることが難しい方です。つまり身体的に、または認知的に何らかの支えが必要ではありますが、感情や自尊心などが劣えているわけではありません。最近の記憶がわからないだけで、これまで生きて来られた経験や事実はなくなってはいないのです。

私自身、年齢を重ねて身体能力も記憶力も低下していると感じます。でも精神はその逆で、こだわりから年々解放され、気持ちも自由になっている。若いときは、努力しなければ、がんばらねば、という自我が重かったのですが、そこから解放されると案外自由でいられるものです。

ふれあいの家では、講師ボランティアが来て絵手紙を描く時間があります。みなさん本当に自由で、先生の言葉も気にせずに「楽しいわー！」と言いながら描いています。小さなハガキがそういう方の絵や言葉には力があります。小さなハガキが大きく見えたりするんです。そんなみなさんの様子を若い人も見てくださったら、きっと年をとることをネガティブに思わないんじゃないかしら。

精神が自由になると、それまでのしがらみや我欲から解き放たれ、本来の自分に戻り、若々しい表情の楽しい時間になります。私たちの行う介護の究極の目的は、一人ひとりの高齢の方が本来のご自分を取り戻し、解き放たれて、1日1日を楽しく過ごしてくださることです。そして、自分の一生は良い生涯だったと思っていただくことです。

――ふれあいの家の近くで運営している「かがやき亭」は高齢者を中心としたさまざまな世代の人の居場所として、「子ども食堂」も定期的に開催されています。

私より若い世代の方々を見ていると、社会生活のなかで、目標を達成しなきゃ、一生懸命努力しなきゃ、と真面目な方が多いですよね。家庭、仕事、学校というように枠組みがいくつもあって、その抑圧や呪縛に対し、精神の自由はどのように担保しているんだろう、と。もっと自由に生きてほしいと思うけれど、それは大きな命題です。人はその人の育った社会や時代の制約のなかでつくられていくのでしょう。

私は戦時中の生まれです。その頃は物質的にも貧しく、多くの人が亡くなり悲しみや怒りに満ちた時代。とにかく生きていくことが先決で、社会の枠組みどころではないのです。しかしそれは、今思うと、ある意味精神的な自由があったのかもしれません。そこから平和が続き、経済的には豊かになりましたが、精神的な貧困を感じます。

「かがやき亭」では、毎月第2・第4土曜日に子ども食堂が開かれています。そこでは、幼い頃から塾に通い、道から外れないように、落ちこぼれないようにと、心をすり減らしている子供を多く見かけます。「親も一生懸命がんばっているから自分もがんばらなければ」と、苦しんでいる子供もいます。そうした子供たちに「そのままのあなたでいいのよ」と解き放ってあげたいとしばしば思うのです。テストの点数が悪い、スポーツもできない、でもそのことに焦ったりしなくていい。あなたはあなたのままでいいんだよ、と。

介護力とは、自然体で人を包み込む力

――そのなかで、最近「だれでもカフェ〜ももふらっと」（以下、ももふらっと）を始めたのはなぜでしょうか。

ももふらっとは「このまちに誰でも集まれる場所をつくりたい」と思って始めました。音楽やダンスを体験し、いろんな人の交流や出会いを目的としています。今は1カ月に1回のペースで、近隣の児童館や福祉施設で、歌や踊りの講師を呼んで開催しています。

きっかけはある重度の障害のある男の子との出会いでした。ある日かがやき亭に、「誰かと食事をすること、音楽を聴くことを経験させてあげたい」と、お母さんが彼をストレッチャーで連れて来ました。彼のように、誰かと一緒に食べたり飲んだり音楽を聴いたりしたくても、コミュニティがない。同じ地域に住んでいながら、そのような現状を知らずにいたことに私は胸が痛みました。音楽を聴く彼は目が輝いていて、「家では食が細いけれどここだとよく食べる」とお母さんはおっしゃいました。その出会いから、私はいろんな人がいきいきとした時間を過ごせる場所をつくりたい、と思ったのです。

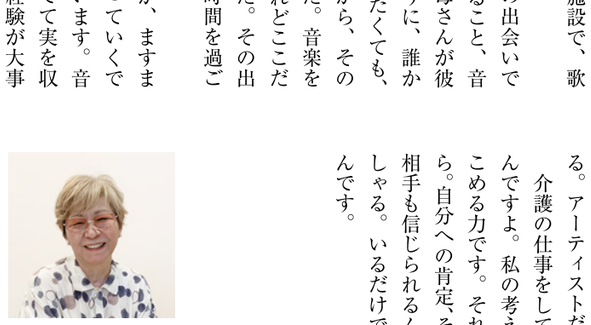
これから日本は少子高齢化に人口減少のなか、ますます精神的な豊かさや人間性の回復が重要になっていくでしょう。そのためには文化が必要なのだと思います。音楽、美術、身体表現、それから畑で種から育てて実を収穫するような経験も含めてクリエイティブな経験が大事になっていくのではないでしょうか。

――TURNには1年ほど前から参加されています。アーティストの伊勢克也さんが最初にふれあいの家に来たのは2018年の1月でした。そこから伊勢さんは、時々ふれあいの家に来て、みなさんと一緒に絵手紙や俳句に参加しています。伊勢さんの様子を見て、いかがですか。

最初、伊勢さんは大学の教授だと伺っていたので、きっとまず理論ありきの方ではないかと思っていました。ですが、そうではなかったんですね。初めていらしたとき「ここはなんともいえない、心地いい空気がありますね」と言われました。私は人と人との重なりを見つけることが大事と気づくのに時間がかかりましたが、伊勢さんはもともと共感力の強い人。そして、自由な精神をもっていらっしゃる。アーティストだなあと思いました。

介護の仕事をしていなくても、根っからの介護力があるんですよ。私の考える「介護力」とは、自然体で人を包みこめる力です。それは人への肯定感があるんじゃないかしら。自分への肯定、そして他人への肯定。自分を信じられて、相手も信じられるんですね。それをごく自然にしていらっしゃる。いるだけでその場が楽しくなる人。そういう人なんです。

［聞き手／構成・佐藤恵美］



大井妙子（おおい・たえこ）
1943年生まれ。両親や義母の介護を経て、東京YMCA福祉専門学校卒業後、2000年4月にNPO法人ももの会を設立。杉並区立桃井第三小学校のなかで、区立高齢者サービスセンターの運営を行う。2010年より西荻・まちふれあい かがやき亭を開設。地域の人びとの生きがいをつくる居場所の運営を担う。社会福祉法人サンフレンズ評議員、NPO法人東京YWCAヒューマンサービス理事。

Photo: Ryohei Tomita



桃三ふれあいの家にて、描かれた絵手紙。



桃三ふれあいの家の俳句の日。左に座っているのが、TURN交流プログラムで2017年度からふれあいの家に通うアーティストの伊勢克也さん。



REPORT

TURN in HAVANA

ターン イン ハバナ

風の国・ハバナで

こいのぼりは水の生き物である鯉が空を泳ぐという、日本の洒落が利いた存在。キューバは風の国、町中はカラフルな洗濯物がたなびき、新しいムーブメントを風が運んでくる。ヨアンのパパロテ（凧）もわたしのこいのぼりにも、風がとても大切。

——— 4月2日　徳本萌子［アーティスト］

伝統文化で超えていく

TURNでは、アーティストが福祉の現場や地域のコミュニティに滞在する「TURN交流プログラム」を続けています。今回は海を超え、〝カリブ海の真珠〟と称されるキューバで実施しました。キューバの首都・ハバナで開催されている「ハバナ・ビエンナーレ」の一環で行われた「TURN in HAVANA」。日本とキューバ、両国のアーティストとアート・コミュニケータ計5名が、ハバナの高齢者福祉施設や小学校と交流し、ともにその成果を発表しました。

日本の参加アーティスト、中村奈緒子さんと徳本萌子さんは、アート・コミュニケータの松橋和也さんとともにハバナに約1カ月半滞在。キューバのアーティスト、ルース・マリエット・トゥルエバさんとヨアン・カラッタラ・コラーレスさんとともに、それぞれの国の伝統文化で作品を制作。中村さんはしめ縄、徳本さんはこいのぼり、ルースさんはヤレイ（帽子の素材となる植物と編み方のこと）、そしてヨアンさんがパパロテ（凧）を。初めてのキューバで高齢者や小学生と共働しました。

DAILY REPORT ①

こいのぼりの色

こいのぼりは、端午の節句から子供の日に掲げられるようになり、時代とともに変化する家族やジェンダーのあり方とともに変容してきた。黒いこいのぼりがお父さん、赤いこいのぼりがお母さん、青いこいのぼりが男の子という、色によるジェンダーロールの振り分けももう古いように思えるし、変わりつつあると思う。キューバで染めるこいのぼりは、キューバの人々が持つ色感と相まってとってもカラフルだ。日本でのこいのぼりの色が、どんな役割をもっていたかを忘れてしまうほど様々な色のさかなたちは、多様性を表すことの後押しをしてくれるように思う。

——— 3月20日　徳本萌子［アーティスト］





（上）アンヘラ・ランダ小学校。日本の伝統的な染色技法である引染めを用い、彩色の前に、こいのぼりの鱗を防染糊でかたどっている様子。下書きもそのうち必要なくなり、自由なラインで直接糊をおいていく。この後、好きな色で彩っていった。
（下）高齢者施設のサンイグナシオ・レジデンシーでこいのぼりを縫ったり、休憩したりする利用者。それぞれ得意分野があり、自然と分業が生まれていく。この3人は見事な連携プレーで、大きなこいぼりをあっという間に縫い上げた。





DAILY REPORT ②

お母さんたちの歌

しめなわの作業をしながら、なぜかパパロテの歌をお母さんがひとり口ずさみ、すると連鎖していろんな歌が聞こえだす。労働歌はどこの国でも自然にうまれる。みんなでやるとたのしいし、仕事にも拍車がかかる。
一緒につくっていて、つくりかたを教える側だったのに、いつのまにかお母さんからアドバイスをもらって、それが無性にうれしい。

——— 4月1日　中村奈緒子［アーティスト］

（上）サンイグナシオ・レジデンシーでの、ヤレイの制作。アンヘラ・ランダ小学校でつくったヤレイによる人型を、サンイグナシオの利用者とともに仕上げた。
（下）アンヘラ・ランダ小学校へ交流した初日。みんなでしめ縄をつくるため、まずは藁を手にとり遊んでもらった。自然と、藁を結び始める子供が多かった。

DAILY REPORT ③

キューバのしめ縄

いつのまにか日本は米の国みたいになっているけれど、米づくりだって、もともとは遠く知らない土地から伝わってきた。そう考えたら、私のこの覚束(おぼつか)ないしめなわづくりにも、ちょっとは安心するし、逆にあらなわ名人みたいになってるお母さんたちを前に、しめなわがキューバのものになっても全然おかしくないと思える。

—— 4月1日　中村奈緒子［アーティスト］





（上） 高齢者施設のベレン・コンベントで、利用者としめ縄を編む様子。覚えが早く、オリジナルな方向で制作が展開されていきながら、隣同士で教え合っては「もっと藁がほしい」とつくる欲求が溢れる姿も。他の植物も提案したが、一番手に馴染むのか、藁での制作が好まれた。
（下） アンヘラ・ランダ小学校で、子供たちにしめ縄について説明する中村さん。

参加メンバープロフィール



（左から） 松橋和也（まつはし・かずや）｜1999年、新潟県生まれ。東京藝術大学履修証明プログラム Diversity on the Arts Project 二期生。
中村奈緒子（なかむら・なおこ）｜1983年、兵庫県生まれ。身近な素材から、日常的に目にする事柄を形にする。
徳本萌子（とくもと・もえこ）｜1993年、神奈川県出身。主に人と自然を題材に、葉に直接ミシンで縫い込む作品などを制作。
ヨアン・カラッタラ・コラーレス（Loán Carratalá Carrales）｜1984年、ハバナ出身。折り紙の技術を陶芸に応用した「Cerigami」などを制作。
ルース・マリエット・トゥルエバ（Ruth Mariet Trueba）｜1991年、ハバナ出身。手工芸や伝統的な技法を通し、記憶をテーマに制作する。

TURN in HAVANA 開催概要

TURN交流プログラム
期間：2019年3月11日(月) – 4月5日(金)
場所：Belen Convent（高齢者施設）／
Residencia de San Ignacio y Lampallia（高齢者施設）／
Ángela Landa（小学校）

展覧会・ワークショップ
期間：2019年4月12日(金) – 5月12日(日)
（「第13回ハバナ・ビエンナーレ」開催期間）
場所：Residencia de San Ignacio y Lampallia（高齢者施設）／
Ángela Landa（小学校）／ Plaza Vieja（旧市街広場）

主催：国立大学法人東京藝術大学、東京都、
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、
特定非営利活動法人 Art's Embrace
共催：Wifredo Lam Contemporary Art Center
（ハバナ・ビエンナーレ事務局）

TURN in HAVANA に参加して

「この施設」から「この街」へ

松橋和也［アート・コミュニケータ］

ハツラツとし、開かれていたハバナの福祉施設。
それはキューバの気候が無縁ではないかもしれない。
アーティストと交流施設をつないだアート・コミュニケータによるレポート。

私たちが通った高齢者施設は2箇所あって、ひとつはサンイグナシオ・レジデンシー、もうひとつはベレン・コンベントというところだ。
サンイグナシオ・レジデンシーは観光客が多くて賑やかな通りにある。いつも午後になると、高齢の男性がロビーに集まってボードゲームをする。日本でいうと、サービス付き高齢者向け住宅という雰囲気の場所。ベレン・コンベントはそこから少し歩いたところにある大きめの施設だ。どちらも福祉施設という言葉に反して、ハツラツとした場所だった。職員さんの制服がなかったら利用者さんとの見分けがつかないかもしれない。それくらい、振る舞いや動き方が若々しい利用者さんが多い印象だ。
そのせいか、交流の時間は私の想像していたものとは少し違った。介護度の異なる人が、一緒に同じレクリエーションをするのはとても大変なことだと思う。誰かが置いてけぼりになったり、つまらなさそうにしたり、という状況になりやすいからだ。だから、全員が同じ関心と集中力を持たずとも、それぞれのやり方や度合いで居られれば良い、と私は思う。それが日本でいくつかの福祉施設を見学したときに考えたことだった。しかしハバナでは、そのような計らいがいらないくらいに、みなさん熱中して私たちと一緒に手を動かしてくれた。それぞれ違った取り組み方で協働していくのだけれど、その積極性に驚いたし、助けられた。
そして、このハツラツさはハバナの気候や風土と無関係ではないだろう。私たちが訪れた施設も然り、ハバナの建物の多くにはパティオ（中庭）がある。噴水や植栽が配置され、小さな植物園のような雰囲気だ。そこには、日差しや雨がそのままに流れてくる。パティオがあることで、建物の内と外は曖昧なものになる。もっといえばハバナでは、路上から家の中にいる人に話しかられるような「開かれた内部」を多く見かけた。扉が開いているので家の中が外から丸見えだし、歩いていると中に居る人と目が合う。ある意味野ざらしなこの感覚は、自分の居場所を「この家」「この施設」から「この街」へと広げてくれるようだった。

連載　もうひとつのTURNを考える〈前編〉

障害者や芸術文化について研究する筆者は、TURNのプロジェクトが始まったころからその展開を見てきました。TURNから「社会包摂とアート」を考えていく連載。

わたしたちが傷ついても良い居場所のありか

長津結一郎
［研究者／九州大学大学院芸術工学研究院助教］

包摂的な環境を目指す場には、つねに排除がつきまとう、と断言するところから考えを始めなくてはならない。包摂という言葉は、英語でいうところのinclusionという言葉を翻訳しており、おおまかにいうと、多様な人々が多様なままで居られるような状況のことを指している。ただ考えてみれば、障害の有無、性別・性自認や性的指向、国籍やその有無、年齢などのさまざまな条件をすべて包摂できるような場など、本当は、どこにもない。

芸術の現場においても同様である。誰か（たとえばある現場ではアーティストかもしれないし、ある現場ではキュレーターかもしれないし、他の誰かかもしれない）が包摂的な環境を芸術の場でつくろうとした時にも、つねに、当然、そこには何らかの排除がある。誰かが作品を選ぶとき、誰かの作品は選ばれない。限られた言語しか対応していない作品発表の場では、鑑賞できない人がいたりする。誰かの常識が誰かの非常識となってあらわれるなか、アートはそれでも包摂的な環境を目指して、暫定的な解を提示し、絶対的な歓待の夢を見させる。

もちろんこれは、芸術の現場に対する俯瞰的な印象である。実際には、例えばTURNのプログラムで見られるような、あるアーティストが福祉施設にて、障害のある人やその周りにいる家族や施設職員などと関係性を丁寧に築いていく様子からは、排除からはほど遠い、平等で豊かな関係性を感じとることができる。このことが積み重なることで、個人と個人のつながりの豊かさが、社会全体へと膨らんでいくことを思わずにはいられない。

だがそれは、ある一定のラインで、どうしても超えられない壁に突き当たる。

社会包摂（social inclusion）という言葉は厄介である。一方でそれは異なる人々が異なったままにいられる社会を構想する言葉のように見え、他方では健常者の社会に非健常者を包み込み覆い隠す言葉のようにも見える。

もちろん、包摂的な社会のビジョンは、社会的に弱い立場にいる人が社会から排除されたり孤立したりするのではなく、ともに支え合うことにある。では、そもそも排除〝される〟側の人々が、排除〝する〟側だった人々と「ともに支え合う」にはどうしたらいいのか。

それは大まかに言えば2つある。1つは、マイノリティの立場におかれている人たちが元気になったり、何かまままでとは異なることをし始めようとしたりすること、言い換えると「エンパワメント」されることが重要である。と同時にもう1つは、マジョリティの立場におかれる人たちの「意識が変化」することも、あわせて重要であると考えられる。[1]

ここで気をつけたいのは、マイノリティの〝立場におかれている〟人、と強調した点である。人はマイノリティとして／マジョリティとして生きているのではない。つねに、ある社会的背景によってマイノリティ／マジョリティという境界が入れ替わりながら生きている。ならば、エンパワメントが必要なのは「マイノリティ」と名指される人ばかりではない。マイノリティの〝立場におかれている〟人――すなわちなんらかの状況変化によってはすべての人にひらかれる。と同時に、「意識が変化」することもまた、すべての人にひらかれるだろう。

ともに支え合う場とは、関わる人々すべてに、何らかのエンパワメントの機会が保証されている場であると同時に、関わる人々すべてが、何らかの意識の変化を求められる場でもある。しかし、場においてはつねに、誰かの「判断」が下される。芸術の現場においても、つねに何らかのディレクションやキュレーションという名の価値判断や削ぎ落としが不可欠である。

そして価値判断をするにあたって、人は、行われていることに対して意味を見いださざるを得ない。ときには、人がより良く生きるためのきっかけを見出す。

本来の「福祉」という言葉の大きな意味は、サービスではなく「人がより良く生きていく」ための言葉だと思うので、広義の概念を再認識し、回復させていくような新しいモデルを、TURNを通してつくっていければいいなと思います。[2]

そして、ときには、人がはじめから持っている力を構想したりする。

TURNというのは、異なる立場の人たちが時間や経験を共有するわけです。そして真ん中にある伝統文化や芸術、ワークショップ、作品や展示が経験や記憶となって残っていく。最後にそれぞれの立場の人の中に、その経験が返っていき、それがそ

れぞれの中で発酵して「人がはじめからもっている力」に気づいたり、目覚めていったり、というのがTURNのモデルというか、TURNの社会的な位置づけというか、[3]

だが、そこで見出す意味は、善としてのみ捉えられるものではいけない。何か新しいことが起きていく際には、良い意味が生まれるだけでなく、当然、悪い意味も起こり得る。その際に重要なのは、悪い意味、悪い変化を不可視化することではない。

（主催側は）何かしらの「よい部分」の評価軸は必要なんだろうけれど、何をもってよしとするのか。「変化」自体をよしとして、それがいい方向に向かっているのか、悪い方向に向かっているのか、極論を言えば、そもそも判断はできないんじゃないか。「変化」というものに対する価値…それがTURNの本質なんだろうなぁ。[4]

そこで起こることの意味や変化を、良い／悪いという軸で規定しすぎることなく、時には判断を保留し、そこにともに付き合っていくことや、その変化を幅としてとらえていくことであろう。

TURNという言葉の意味は、ここでも、問わない。TURNというプロジェクトは、「TURNとは何か」という問いを温め続けている。プロジェクトを実施するうえでTURNという言葉を暫定的な概念、もしくは見立てとして置くことは、近年のアートプロジェクト論でいうところの「OS（オペレーション・システム）」という機能にも近い。

その一方、何がTURNという概念の内側にあり、何が外側にあるのかという判断が、TURNを弁じる人々がジャッジメントしている、もしくはせざるを得ない状況にある。とすると、TURNという言葉が提起しようとすること、すなわちすべての価値を転換させる可能性の幅と、現実のプロジェクトがひらく可能性の幅には、ギャップが生まれる。

一人称としての異なる「わたし」の集合体としての「わたしたち」のための居場所。そのような場を構想するには、もちろん、「わたし」の目の前に複数の選択肢があることと、それらを柔軟に選択できる幅が求められる。では、そのような場――換言すると、もうひとつのTURNは、どこにあるのか。

芸術を通じた包摂の場は、マジョリティによるマイノリティの消費の場でもなく、マイノリティの過剰な自己実現の場でもない。ひとりひとりをエンパワメントしつつ、ひとりひとりの中に意識の変化が生まれる場である。それはもう少し違う言葉で言えば、自己を振り返り、省察する場でもある。

暴力的な言い回しであることを重々承知で言うと、わたしたちはみな、マイノリティであり、マジョリティでもある。そしてそこにはある種の、傷つきがある。自己否定の沼が、そこにある。わたしの人生に意味などあっただろうか、と苛まれる瞬間がある。

そしてその沼はいつしか、他者の否定につながるかもしれない。彼らの人生に意味があっただろうか、と刃を向ける人がいる。彼らの人生に生産性などなく、彼らは不良品だったのではないか、と語気を強める人がいる。

2016年に相模原の障害者施設殺傷事件を受けて批評家・杉田俊介は書いた。

人間の生には平等に意味が無いのであって、意味と無意味の線引きを拒絶し続けることで、僕らは内なる優生思想／ヘイト的なもの／ジェノサイドの芽を断ち切っていくべきである、なぜなら、優生的・ヘイト的な差別は、社会的弱者や他者を抹殺していくのみならず、僕ら自身をも緩慢に滅ぼしていくから[5]

わたしたちが、芸術を通じた包摂的な場のデザインを目指すのだとしたら、それはまず、現場のただなかにいるわたしが、自分に、他者に、つねに傷つくことを前提としながら、それでもそこにある豊かさと信じるものを、言葉にすることを続けていくよりほかない。

意味があるかないか、それがどのように批評できるかできないか、という地平ではない。ただ、目の前にいる人と、面と向かってやりとりすること。そこにある豊かさを見つけ出すこと。それを丁寧に言葉にしようとすること。その言葉を、他者に伝えようとすること。自分とは異なる言葉の持ち主を見つけること。

それも、より小さな声を聞き逃さないように。

そうすることではじめて、わたしたちは、わたしたちの居場所をつくっていくのだと思う。

1――社会包摂の捉え方については下記参照のこと。九州大学×文化庁共同研究チーム（編）『はじめての文化芸術×社会包摂ハンドブック』九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ、2019年。
2――奥山理子の発言。森司（監）『TURN NOTE：「TURN」を考えたときの言葉 2016』アーツカウンシル東京、2017年。
3――吉本光宏の発言。右に同じ。
4――五十嵐靖晃の発言。森司（監）『TURN NOTE：「TURN」とつながったときの言葉 2018』アーツカウンシル東京、2019年。
5――立岩真也・杉田俊介『相模原障害者殺傷事件：優生思想とヘイトクライム』青土社、2017年、176頁。

長津結一郎（ながつ・ゆういちろう）
アーツ・マネジメント、文化政策学、芸術社会学などをベースとし、障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行う。また近年は、芸術活動の担い手育成や市民創作ワークショップをフィールドとして、芸術文化の持つ役割についての考察を深めている。博士（学術・東京藝術大学）。著書に『舞台の上の障害者：境界から生まれる表現』（九州大学出版会、2018年）。

表紙のストーリー

交わるアート

表紙の作品が生まれた背景を、
TURNに参加しているアーティストと交流先のエピソードから。







表紙の作品

《歩きたくなる道》2018年
岩田とも子＋富士清掃サービス

毎日清掃をするメンバーが見た、公園の日常と移り変わり

岩田とも子さんは、身近な自然物の観察・採集を通して、宇宙的なサイクルなどをテーマに制作するアーティストです。生き物に対する素朴な視点、そこからはじまる学びと表現を大切にしています。

TURNとの関わりは、2017年の「TURN in BIENALSUR（ビエナールスール）」（アルゼンチン、ペルー）への参加がきっかけでした。その後、日本でも TURN 交流プログラムを続けることになり、2018年春、公園やさまざまな施設の清掃業務を請け負う東京都町田市の就労継続支援Ｂ型事業所「富士清掃サービス」を訪れました。交流を続けながら、メンバー（利用者）が日々見聞きしたり感じたりした公園の風景を、絵や言葉で丁寧に記録していきました。それは、ほぼ毎日同じ公園を清掃するメンバーたちだからこそ知る、自然の移り変わりや、地域の人たちの姿でした。

季節が秋にさしかかり、半年間の交流で富士清掃サービスのメンバーから受け取ったこと、感じたことを形にしてメンバーと共有してみたいと岩田さんからアイデアがあがりました。日々清掃している公園の「道」をテーマに、メンバーとともにワークショップを行い、色とりどりに表現。最終的には、みんなの作品を集め、一つのコラージュ作品に仕上げました。この作品は、2019年度の富士清掃サービスの事業所案内パンフレットの表紙にも採用されています。

文・田村悠貴［NPO法人 Art's Embrace］

※表紙の作品は、本誌のために改変したものです。TURN公式ウェブサイトにオリジナル作品を公開しています。



岩田とも子（いわた・ともこ）

1983年神奈川県出身。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。発表形態は多様で、2012年に畑を舞台に展開した「SILENT MIXER」、2014年に香川県粟島での自然物を採集するプロジェクト「粟島自然観察船」、その他自然学校の講師と共同で森の中で子供ワークショップを定期的に行う。TURNフェス5では「意識の散歩」をキーワードに紙を使った参加型の企画を展開。

×

富士清掃サービス（ふじせいそうサービス）

東京都町田市の就労継続支援Ｂ型事業所。利用するメンバーは約 40 名。屋内外の掃き掃除、モップ掛け清掃、トイレ清掃から、室内のワックス清掃まで、複数の清掃の仕事を行う。TURN には 2018 年より参加。

TURN

TURNとは、障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクトです。これまでに約70名のアーティスト、約60の施設や団体が参加しています。年間を通して展開している多彩なプログラムをもとに、国内外で広くその意義を発信していきます。

主催 = 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、
特定非営利活動法人 Art's Embrace、国立大学法人東京藝術大学
監修 = 日比野克彦［アーティスト、東京藝術大学美術学部長・先端芸術表現科教授］
プロジェクトディレクター = 森 司［アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長］

TURN公式ウェブサイト : turn-project.com

文化でつながる。未来とつながる。
Tokyo Tokyo FESTIVAL

「Tokyo Tokyo FESTIVAL」とは、オリンピック・パラリンピックが開催される2020年に向けて東京を文化の面から盛り上げるため、多彩な文化プログラムを展開し、芸術文化都市東京の魅力を伝える取組です。TURNは、その一環として実施しています。

Tokyo Tokyo FESTIVAL 公式ウェブサイト：https://tokyotokyofestival.jp

TURN JOURNAL
SUMMER 2019 — ISSUE 02

—

2019年8月14日発行

監修 = 森 司［アーツカウンシル東京］

編集 = 佐藤恵美
畑まりあ［アーツカウンシル東京］／田村悠貴［特定非営利活動法人Art's Embrace］

デザイン = 星野哲也

印刷 = アトミ

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28　九段ファーストプレイス8階
TEL: 03-6256-8435 ／ FAX: 03-6256-8829
Email: info@turn-project.com
URL: www.artscouncil-tokyo.jp

©2019 Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
All rights reserved



東京都

ARTS COUNCIL TOKYO

Arts Terrace

TOKYO GEIDA